

助成年度：平成7年度

[所属] 熊野川小学校

[役職] 教諭

[氏名] 湊 秋作 (他計8名)

[課題]

天然記念物ニホンヤマネ保護のための総合的な研究を通じて

森と人との共生を図る

[内容]

ヤマネの総合的な研究を通じて次のことが明らかになった。

雄の行動範囲は、雌より広く、複数の雌のホームレンジを覆っている。成獣の雌は、彼女のホームレンジで数年間、出産育児する。雌の仔は母親のホームレンジから出て、子育てを行う。

ある雌の仔は、母親のホームレンジから約1.5km離れて出産育児した。

雄は、ホームレンジの境界線や食事する木で攻撃音を発した。

ヤマネは枝を移動するとき、枝の下側をさかさまになって移動することがほとんどであった。これは、小さなヤマネにとって枝の上側は小枝や葉が移動の障害物となるからと思われる。

夜、樹上を移動するのは、ほぼ同じコースを何回か回る。夜の樹上行動は移動と食餌する木での滞在の2つの要素から成り立っていた。

ヤマネの食べ物は、昆虫類と植物であった。ズミは、通期に渡って食べたので重要な餌となっていた。ただし、ズミの枯れ枝の樹皮のみを食べた。

ヤマネは秋に貯食した。

繁殖用の巣は、球状で、巣材は樹皮と蘚苔類であった。蘚苔類のほとんどの種は樹上性の種だったので、これからもヤマネの利用空間は樹上であることが確認された。しばしば、ヤマネは、てんぐす病のため小枝が束状になっているツツジの枝先に巣を作った。

ヤマネは、繁殖期以外は、特定の巣を作ることはなく、ホームレンジ内の朽枝や樹洞や枝の間などで休むので放浪者の動物であると考えられる。

冬眠場所は、落ち葉の下、土中、朽ちた幹の中などであった。ヤマネは落ち葉の下などの浅い所で冬眠していたので、雨に濡れても大丈夫な防水性の体をもっていると考えられる。

出産シーズンに地理的変異がみられた。山梨県での初夏に対し長崎では秋であった。

分子遺伝学的研究から、遺伝学的にはヤマネは関東集団と関西集団に分かれることがわかった。

ヤマネは森林性で、かわいらしく、天然記念物でもある。小学校低学年から大人まで、生物のかわいさ、不思議さ、森の保全等を系統的に指導する環境教育の教材として非常に適していることがわかった。

人間活動により孤立してしまった森に生息するヤマネを守るための具体的な施策としてヤマネブリッジを考案し、提示した。今後、森と人が共に生きていくためにこのような方法を開発すると同時に開発を行わない地域を確保する必要がある。保護のための理論と施策を確立するために基礎的な研究の蓄積が急務である。